

## 令和6年度総会挨拶に代えて「右肩下がりに期待感・幸福感を感じるか？」

日本人の多くがランキング好き。長期に渡り『競育』の下でキャリアを積んできた人たちであれば必然ともいえる資質。しかし、ランキングの上下にとらわれ過ぎると本質を見失うことが往々にしてある。私たち日本人の「生き方づくり」が問われている。

【世界幸福度ランキング】国連の持続可能な開発ソリューションネットワークは、3月20日、11回目の「世界幸福度ランキング（意識調査）」を公表した。143か国・地域の中での日本の順位は51位。国力との相対からすると低いと言わざるを得ないが、意識調査ゆえ、日本人の控え目な気質からするとこの順位もうなずける。その中であって、高順位を獲得しているEU諸国が、おしなべて高齢者に対して若年者世代の幸福度が高い一方、日本はというと逆傾向の結果である。

【訪日ドイツ人観光客の声】昨年GDPでわずかに日本を超えランキングを3位に上げたドイツ。日本国内では、日本経済凋落の第2歩、3歩と。次はインドに、さらにはインドネシアにも抜かれるだろうとアナリスト予想が沸騰しているも、ドイツ人はいたって冷静。かえって、「全国いたる所自動販売機で飲み物が買え、探せばどこにでもきれいなトイレが見つかる。公共交通を利用すれば予定時間通りに移動もできる。ドイツの10年後の社会」と、驚いている。公德心の高さ、生活の利便性、移動の自由度を誇るもので、10年後のドイツ社会にしても実現は無理であろう。

【戦後社会の軌跡の中で】本法人のメンバーの多くは昭和20年代生まれ。70年以上の人生を戦後社会の草創期から、発展期、成熟期、そして今や低迷期(?)の過程を共に歩んできた。一つの指標をもってすれば、期間の長短はあるにせよこの4サイクルを辿ることは不思議ではない。そんな中、ハード面は限りなく拡大・充実してきた日本社会において、「右肩上がり神話」が幸福度と常にリンクして語られてきた。「失われた30年」と呼ばれ低迷期を迎えている現在、現状からの脱出の論点として「量から質(経済)」「集中から分散(社会)」「既成からの変革・創造(意識構造)」への期待が語られつつも、その道筋がなかなか具体的になってきていない。特に、失敗をしないことを強いられながら学業や仕事に邁進してきた多くの日本人にとって「右肩下がりの低迷期」は、敗北であり後退に他ならない。しかし、このような低迷期にこそ失敗に学び、再チャレンジに向けて始動のエネルギーを蓄える時。「成功には不思議があるが、失敗には不思議がない。」の成句。変革・創造にエネルギーをたぎらせている時にこそ、期待感、そして幸福感が高まっていくと信じていたい。

【再チャレンジ支援活動への期待】本法人の第1次カンボジア支援活動(2009～2019)は、現地の求めに応じてハード面の支援拡大に努めてきた時期。とりもなおさず寄附金、助成金の確保の右肩上がりを期待して止まない時期であった。思い返すに、現地での成果物がどんどん増え右肩上がりの支援活動を実感しつつも、なかなか私たち自身の喜びや成長に繋がらなかったと感じている。第1次カンボジア支援活動の後半期には、授業実践や教員交流などソフト面、特に人への投資を増やしつつ、「学校の未来への期待」を付加し高めてきた。これらの活動内容は、成果物として量的に積み上げられたものではなく現地の意に沿わない「右肩下がりの支援」であったかもしれない。しかし、右肩下がりの分私たち個々への見返りが大きかったとも言える。私たちが標榜する「共育」の具現化が、幸福感の高まりへと導かれる世界であると捉えている。

本年度もご批評、ご尽力のほどよろしく申し上げます。

<文責足立泰敏>